天花寺丘陵内遺跡群発掘調查報告(V)

~一志郡嬉野町天花寺所在、清水谷遺跡(第4次)の調査~

2000.3

三重県埋蔵文化財センター

清水谷遺跡は、三重県のほぼ中央に位置する一志郡嬉野町に所在します。この 嬉野町には雲出川の支流である中村川が貫流しており、その流域は一志郡の中で も特に重要な文化を育んできた地域であります。

今回の調査は、(一) 天花寺一志嬉野インター線地方特定道路整備事業に伴う緊急発掘調査であります。天花寺地区は、前方後方墳である筒野古墳や天花寺廃寺などが造られている場所であり、嬉野町内でも特に遺跡の集中する地域であります。また、平成7年度から当センターが継続している、天花寺丘陵内遺跡群の発掘調査でも、当地域の歴史を解明する上で大きな成果を上げており、その重要性が認識されています。今回の発掘調査でも新たな発見があり、そのことが再認識されました。しかし、このような貴重な遺跡が記録保存という形でしか残せないことは、誠に残念というほかありません。これまでに得られた成果をどのように活用していくかが、わたくしどもの今後の重要な課題であると考えております。

調査にあたっては、地元のみなさまをはじめ、嬉野町教育委員会、県土整備部 道路整備課・津地方県民局久居建設部などの関係機関から多大なご協力と暖かい ご配慮を頂きました。文末になりましたが、心より厚く御礼申し上げます。

2000年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 大井與生

例 言

- 1 本書は三重県一志郡嬉野町天花寺字清水谷に所在する清水谷遺跡の発掘調査報告書 である。
- 2 本遺跡の調査は平成 11 年度 (一) 天花寺一志嬉野インター線地方特定道路整備事 業に伴い、三重県教育委員会が三重県県土整備部道路整備課から経費の執行委任を受 けて実施した。
- 3 調査および整理は次の体制により実施した。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査第一課

主事 柴山圭子

土工担当 三重県農業開発公社

調査期間 平成11年9月28日~同年12月21日

調査面積 600m²

- 4 調査にあたっては、地元嬉野町の方々をはじめ、三重県県土整備部道路整備課、津 地方県民局久居建設部、嬉野町教育委員会からの協力を得た。
- 5 当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課、及び資料普及グル ープが行った。また、本文の執筆・編集・写真撮影は、柴山が行った。
- 6 本書の方位は、国土調査法の第Ⅵ座標系を基準とする座標北を用いた。
- 7 挿図と写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。なお、写真図版は縮 尺不同である。
- 8 本報告書での用語は、以下のとおり統一した。

つき…………「杯」「坏」があるが、「杯」を用いた。

9 当報告書での遺構番号は、第1次調査からの通番となっている。今回の調査は遺構 番号330から付している(但し、当センター担当調査に限る)。また、番号の頭には、 見た目の性格によって以下の略記号を付けた。

SH:竪穴住居 SK:土坑 pit:ピット、柱穴

- 10 当発掘調査の記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
- 11 スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。 各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本 文 目 次

1	177	•••••••••••••••••••••••••••••••••••••••	_
П		と環境······	
Ш		の成果····································	
IV	結語		1
		挿 図 目 次	
第1		遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第 2		遺跡地形図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第3		調査区位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第 4		調査区遺構平面図	
第 5		調査区土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第 6	図	土坑 SK 335·334, 竪穴住居SH 331平面図及び断面図····································	
第 7		竪穴住居 SH 330 平面図及び断面図·······	
第8	図	出土遺物実測図	0
		-t · ·	
		表目次	
第 1		遺構一覧表	
第 2	表	出土遺物観察表	9
		写 真 目 次	
ran ite			_
図版	. 1	調査前風景	
		調査区全景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
図版		SK335 ·SH330 ·······13	
図版		SK334·出土遺物 1 ······· 14	
図版	4	出土遺物 2	5

I 前 言

1 調査の契機

一志郡嬉野町島田地内に近畿自動車道(久居~勢和多気)一志嬉野 I.C.が建設されたのに伴い I.C. 問辺道路の整備が必要となり、天花寺丘陵一帯は大きく改変されつつある。この一端として天花寺一志嬉野インター線の改良工事が計画され、平成7年度以降、発掘調査が進められてきた。天花寺丘陵周辺では調査原因は異なるものの、過去数々の調査が行われているが、清水谷遺跡の調査としては今回で第4次の調査となる。

2 調査の経過

(1) 調査経過概要

清水谷遺跡の調査は、600㎡という小面積の調査 であったが、事情により3回に分けて行った。これ らを便宜上、A地区・B地区・C地区とする。

A地区は、9月末に重機による表土掘削を開始し、10月4日から作業員を投入しての調査を行った。B地区は11月2日に、C地区は12月17日に表土掘削を行った。すべての調査が終了したのは、12月21日である。詳細については「調査日誌抄」を参照されたい。

なお、A地区における調査に協力してくださった 作業員のみなさまの御芳名を記し、感謝の意を表す る。 青木一訓、北角光津子、酒井巳紀子、佐波靖夫、 関本栄一、関山恭子、中島隆男、萩原幸子、 長谷川ハルエ、松浦ノブ子、山崎 衛

(五十音順、敬称略)

(2) 調査日誌(抄)

- 9月28日 現地協議後、A地区重機掘削開始。 包含層より土師器片数点出土。
- 10月4日 人力掘削開始。竪穴住居・ピット等検出。 土層断面実測。
- 10月6日 SH 330 掘削。東側壁にカマド。土師器 皿、土師器甕等出土。
- 10月8日 遺構掘削、カマドを残しほぼ終了。
- 10月9日 カマド掘削。土師器把手付甕等出土。
- 10月13日 調査区全景写真撮影。
- 10月14日 午前中振り込み。午後から遺構実測開始。
- 10月15日 遺構実測終了。
- 11月2日 B地区重機掘削。

遺構掘削。土坑1基確認。出土遺物なし。 平板実測、土層断面実測。 B地区調査終了。

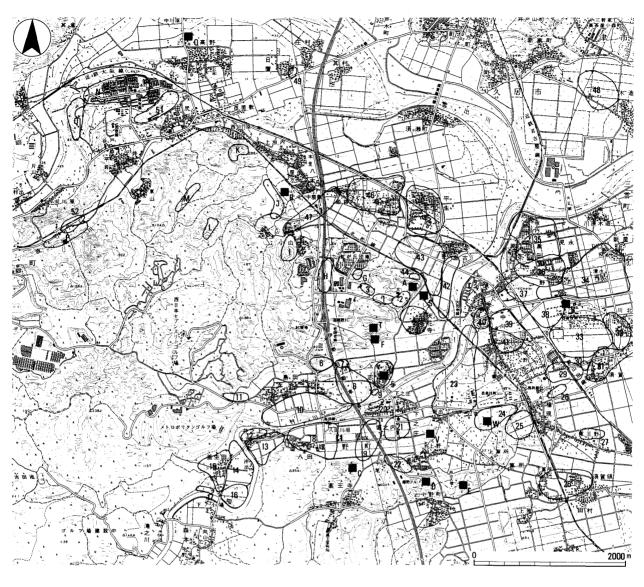
- 12月17日 C地区重機掘削開始。
 SK 334 検出、掘削。 SK 335 、他土坑
 数基検出。
- 12月20日 遺構掘削。 調査区 1/100 平板実測。
- 12月21日 調査区全景写真撮影。午前中で調査終了。

Ⅱ 位置と環境

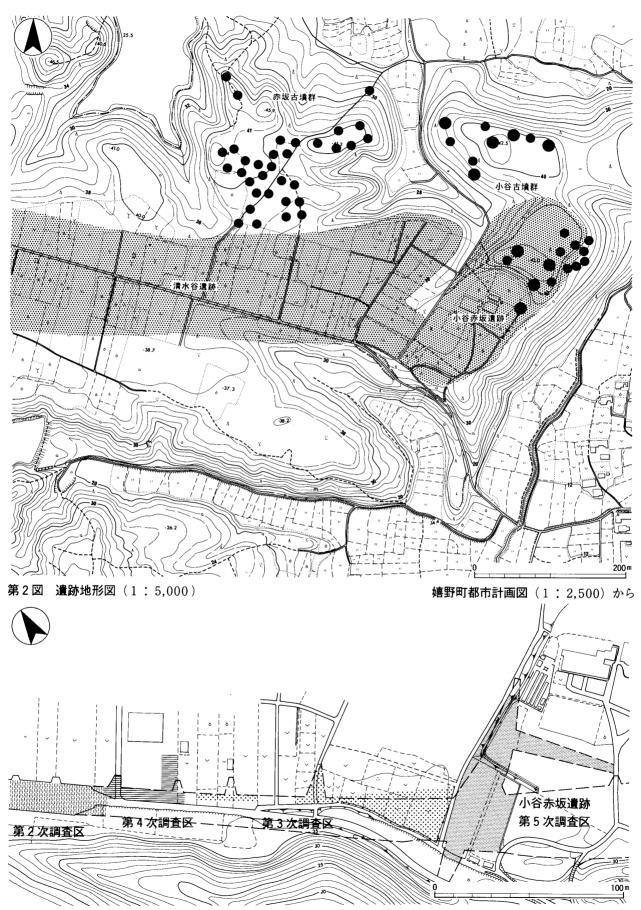
清水谷遺跡は一志郡嬉野町天花寺字清水谷に所在 する遺跡である。遺跡は、嬉野町と一志町が境を接 する通称「小鳥山」から東方へ派生する、標高約37 mの平坦な天花寺丘陵上に位置する。

この天花寺丘陵を挟んで北側には雲出川が、その 東側には中村川が流れ、両河川は丘陵の北東約 1.5 kmの地点で合流する。したがって、当地は中村川の 下流域であるとともに、雲出川の中流域でもある。

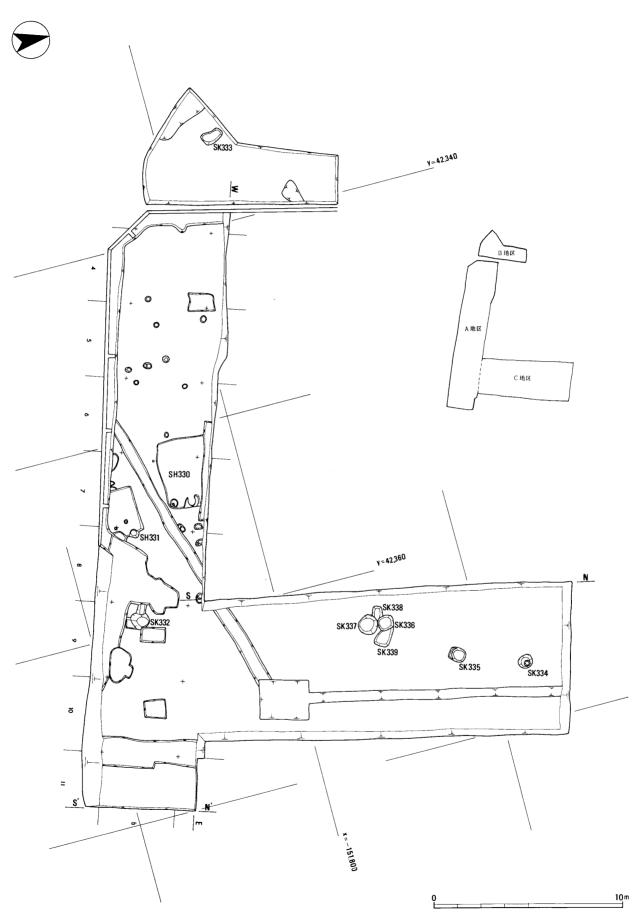
この両河川流域についての歴史的環境、天花寺丘陵および周辺の歴史的環境については、「天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告」。や、「天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告IV」。等に詳細な記述があるので、それを参照されたい。



1. 清水谷遺跡 2. 小谷赤坂遺跡 3. 馬ノ瀬遺跡 4. 天花寺北瀬古遺跡 5. 薬師寺北裏遺跡 6. 蛇亀橋遺跡 7. 焼野遺跡 8. 天保遺跡 9. 郡一遺跡 10. 上野垣内遺跡 11. 島田遺跡 12. 井之上遺跡 13. 閉垣内遺跡 14. 弥五郎垣内遺跡 15. 釜生田遺跡 16. 天白遺跡 17. 辻垣内瓦窯跡群 18. 八田遺跡 20. 御所垣内遺跡 19. 堀之内遺跡 21. 下之庄遺跡 22. 中尾垣内遺跡 23. 下之庄東方遺跡24. 嬉野遺跡 25. 山神田遺跡 26. 田村西瀬古遺跡27. 竜王野遺跡 28. 高くね遺跡 29. 荒野遺跡 30. 松葉遺跡 31. 天王垣内遺跡 32. 庵ノ垣内遺跡 33. 川北清水遺跡 34. 片部遺跡 35. 黒田遺跡 36. 野田遺跡 37. 貝蔵遺跡 38. 五反田遺跡 39. 六反田遺跡 40. 針箱遺跡 41. 一色垣内遺跡 42. 里前遺跡 43. 堀田遺跡 44. 天花寺瓦窯跡 45. 平生遺跡 50. 唐木垣内遺跡 46. 片野遺跡 47. 鳥居本遺跡 48. 木造赤坂遺跡 49. 貝鍋遺跡 51. 田尻上野遺跡 52. 下名倉遺跡 D. 上野 1 号墳 A. 天花寺城跡 B. 西山1号墳 C. 錆山古墳 E. 向山古墳 F. 筒野1号墳 G. 片野池古墳群 H. 西野古墳群 1. 小山古墳群 J. 中野山古墳群 O. 上野山狐塚古墳群 K. 西出山古墳群 L. ヒジリ谷古墳群 M. 薬師谷古墳群 N. 上野山古墳群 P. 下名倉古墳群 Q. 高寺廃寺 R. 八太廃寺 S.天花寺廃寺 T. 中谷廃寺 W. 嬉野廃寺 U. 一志廃寺 V. 上野廃寺 第1図 遺跡位置図(1:50,000) 国土地理院「大仰」 (1:25,000)から



第3図 調査区位置図(1:2,000)



第4図 調査区遺構平面図(1:200)

Ⅲ 調査の成果

1 調査の方法

本遺跡の調査面積は 600㎡である。掘削は表土 については重機掘削を行った。それ以外は人力によ る掘削である。

今回の調査区は3か所にわたる。それぞれは、隣接した土地でありながら、都合により3回に分けて調査を行ったものである。これらを便宜上、調査を行った順に、A地区・B地区・C地区とする。

この内、A地区については4m四方の枡目で区切ることによって、小地区を設定している。西から数字、北からアルファベットを付け、北西隅交点をその小地区の符号とした。なお、設定は国土座標とは無関係である。

調査区の平面図は、遺構密度によりA地区は1/20 手書き、B・C地区は1/100平板で作成した。竪 穴住居・土坑などの出土遺物を伴うような遺構 は、原則的には個別に1/10で作成した。

2 基本層序

調査区は標高約37mの丘陵上に位置している。現 状は企業敷地である。調査区の基本層序は上から順 に、次のとおりである。

- I 明緑灰色土に礫を多数含む (客土)
- Ⅱ にぶい褐色土 (旧表土)
- Ⅲ 褐色土
- Ⅳ 明赤褐色土 (検出面)

Ⅲ層は、調査区全面では確認できず、旧表土直下が 遺構検出面になっているところもあった。

3 遺構

検出した遺構は、竪穴住居 2 棟、土坑 8 基である。 また、いくつかのピットがあり、掘立柱建物の存在 も想定できるが、今回は明確にすることはできなかっ た。ここでは主な遺構について記述する。

a 弥生時代の遺構

SK335 (第6図) C地区の北部中央付近で検出した土坑である。平面は、長径約0.85m、短径約0.75mの不整楕円形で、検出面からの深さは約0.1

mである。土坑内には、壺(1)が口縁部を北に向けて、横位の状態で据えられていた。土坑に中段があることから、初めに大きめに掘られ、ある程度のところで土器の大きさにあわせて掘られたものと考えられる。

人骨などは確認できていないが、出土状況などを 考え合わせると、土器棺墓であったと考えるのが妥 当であろう。

b 奈良時代の遺構

SH330 (第7図) A地区北端部中央付近で検出した。今回の調査区で確認できたのは南側半分のみであるため、全体の規模は不明である。平面形は隅丸方形で、東西約3.5mである。

壁周溝、主柱穴に相当するものは認められなかった。また、貼床に相当するものも確認できなかったが、土層断面の観察から、第3層の橙色土がそれであった可能性がある。

カマドは東壁に設置されている。掘り込みを伴わず、床面上に造られる構造と考えられ、周囲には馬蹄形に盛土を行っている。被熱は、前庭部の床面が一番激しく、奥壁、側壁には被熱が見られるものの弱いものである。カマド内には、支柱石が残っており、それより浮いた状態で、把手付甕 (5) や甑、土師器片等が出土している。

カマドの南、建物南東隅にあたる部分には、貯蔵 穴と考えられる小土坑がある。

出土遺物は、上述した他に、台付皿 (4)、甕 (3)、また混入遺物と思われる埴輪片 (6) 等がある。

SH331 (第6図) A地区南端部中央付近で検出した。南半分が調査区外にあるため、全体の規模は不明である。平面方形で、東西約2.4mである。

壁周溝は認められなかった。また、内部に若干の ピットはあるものの、主柱穴に相当するものは確認 できなかった。

建物東壁に焼土塊が確認できたため、それがカマドに相当するものと考えられる。土坑状になるため、 底面を掘り窪める半地下式の構造であると思われる が、東半分が攪乱によって破壊されているため、形 態などは不明である。

遺物は、竪穴住居のほぼ中央部から土師器の杯 (2) が倒立状態で出土したほか、ピットから砥石 が出土した。ただしこのピットは、東壁を突き抜け ており、竪穴住居に伴うものかは不明である。

c 時期不明の遺構

SK334 (第6図) C地区北端部中央付近で検出し た遺構である。長径約0.75m、短径約0.65mの不整 楕円形で、検出面からの深さは、一番深いところで 約 0.4mである。土坑内には、様々な大きさの礫が 認められたが、底面からは浮いた状態であった。埋 土中、礫の周辺に炭、焼土が確認できたが、人骨 は認められなかった。

遺物は、少量の土器片を含むだけで、時期は不明 である。

4 遺物

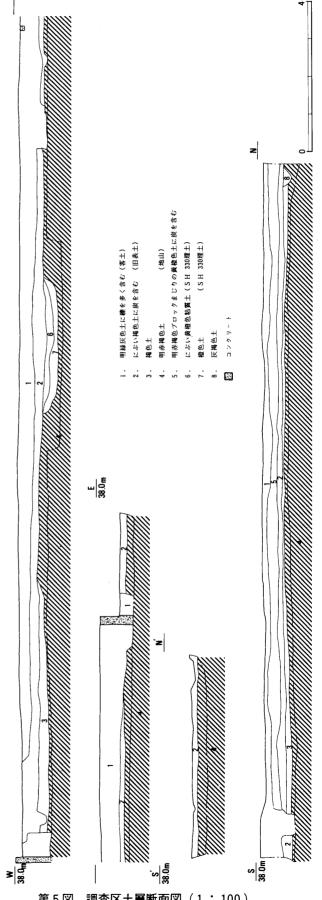
今回の調査で出土した遺物は、整理箱で4箱程度 である。以下、出土遺物の概略を記述する。詳細に ついては観察表を参照されたい。

① 弥生時代

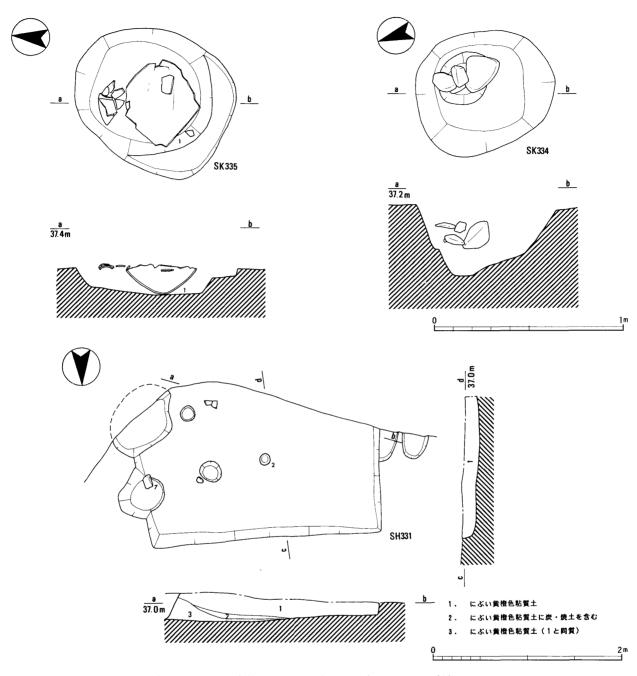
SK 335 出土遺物 (1) 1 は大形の壺である。垂下 口縁を有する。磨滅が激しいため調整は不明瞭であ るが、口縁拡張部外面には、辛うじて波状文が観察 できる。また、外面はハケメ調整されている。頸部 には、突帯が貼付され、その上下に棒状工具による 斜め方向の刺突文が施されている。体部上半には櫛 描直線文と櫛描波状文が交互に2段巡らされている。 弥生時代後期初頭のものと思われる。

② 奈良時代

SH 330出土遺物 (3~6) 3・5は土師器の甕で ある。3は、体部がほぼ球形で、口径13.0cm、高さ 10.8cmである。内・外面ナデ、口縁部はヨコナデ 調整されている。磨滅が激しく、特に外面の調整が 不明瞭である。5は、把手を有する。内・外面ナデ 調整、把手ははめ込んだあとナデ調整されている。 4は、土師器の大形の台付皿である。口縁約33.5 cm、高さ3.5 cmである。口縁部ヨコナデ、内面・底 部ナデ、外面はケズリ調整されている。以上3点は、 8世紀後半のものと思われる。6は、円筒埴輪片で



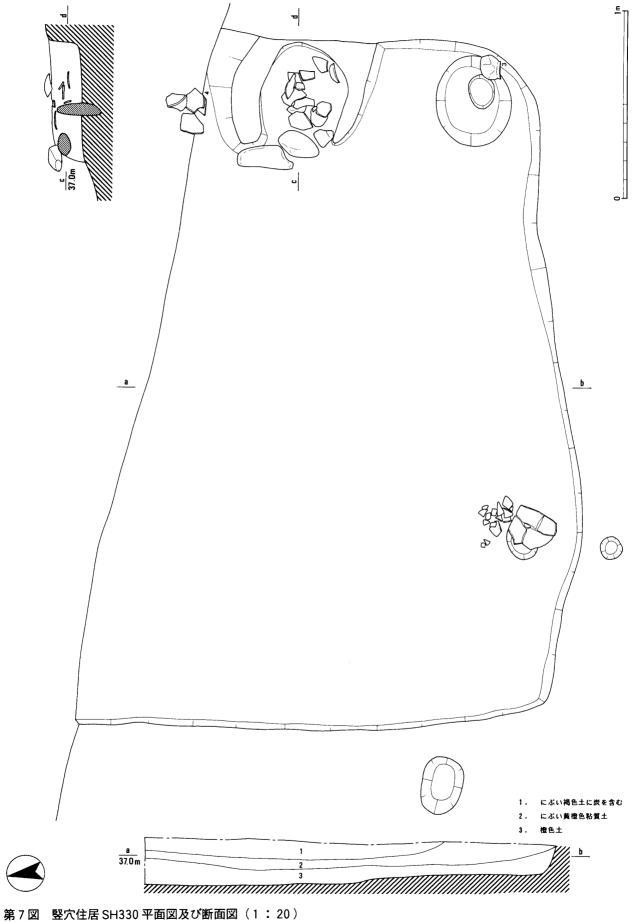
調査区土層断面図(1:100) 第5図



第6図 土坑 SK335・334 (1:20)、竪穴住居 SH331 (1:40) 平面図及び断面図

遺構番号	小地区	性	格	時	期	備考	遺構番号	小地区	性	格	時 期	備考
SH330	b 7他	竪穴	住居	奈	良	隅丸方形、東西約3.5m、カマド	SK335		土	坑	弥生後期	不整楕円形、約0.85m×約0.75m
SH331	b 7他	竪穴	住居	奈	良	方形、東西約2.4m、カマド?	SK336		土	坑		方形、径0.7m、SK338,SK339より新
SK332	b 9	土	坑	奈	良	円形、径約2.4m	SK337		土	坑		円形、径1.1m、SK338,SK339より新
SK333		土	坑			隅丸長方形、約1.1m×約0.6m	SK338		土	坑		隅丸長方形、約1.1m×約0.7m
SK334		土	坑			不整楕円形、約0.75m×約0.65m	SK339		土	坑		隅丸長方形、約1.0m×約0.5m

第1表 遺構一覧表



ある。円形透孔の一部が残る。また、破片の下部に 微かにナデが確認できるため、ここから、突帯が貼 付されているものと思われる。外面は、継続するB 種ヨコハケで突帯間を一度に調整している。工具の あたりは斜め方向である。内面は、指頭圧で調整後、 ナデ調整されている。竹内英昭氏による伊勢地方の 円筒埴輪編年でいう、3期にあたる。混入遺物であ る。 SH 331 出土遺物 (2・7) 2 は土師器の杯である。 外面・内面とも磨滅が激しく、調整は不明瞭である。 7 は砥石である。砂岩製である。厚みのある素材を 良く使い込んでおり、ほぼ全面が、研磨面となって いる。片面には、数条単位の溝状の使用痕が認めら れ、もう片面には、敲打痕がある。金属の研磨のほ か、敲石としても使用されていた可能性がある。

10 . 17	登録	no ta	出土位置	計	測値(c	em)	-10 ata (04	焼		TB +- rh-		++
番号	番号	器 種	口径	器高	その他	調整(技法)の特徴	胎土	成	色 調	残存度	備	专	
1	001-01	弥生土器 壺	SK335	27.5	約50		ハケメ・刺突文・櫛描直線文・ 櫛描波状文・ナデ・ミガキ	やや粗(~4.0 m砂粒含)	並	にぶい黄橙 10YR 7/4	1/3	磨滅激	しい
2	002-03	土師器 杯	d 7 SH331	13.3 ~13.8	3.4		ナデ	やや密 (微砂 粒含)	並	外) 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大	ほほ 完存	磨滅激	(Lv
3	003-01	土師器	ь 7 SH330	13.0	10.8		ナデ	やや粗(~1.5 m砂粒含)	並	外:にぶい橙 7.5YR 7/4 内:にぶい黄橙 10YR 7/4	ほぼ 完存	磨滅激	(LV
4	002-02	土師器 台付皿	ь 7 SH330	約33.5	3.5	約24.5	ナデ・貼付ナデ・ケズリ	やや密(~ 1.5 m砂粒含)	並	外 にぶい橙 7.5YR 6/4 内 橙 7.5YR 6/6	1/10	磨滅激	(LV
5	002-01	土師器 把手付蹇	b 7 SH330				ナデ・貼付ナデ	やや密(~ 2.0 m砂粒含)	並	外 にぶい橙 7.5YR 6/4 内			
6	002-04	円筒埴輪	ь 7 SH330				B種ヨコハケ・ナデ	やや密(微砂 粒含)	並	外:明赤褐 5YR 5/6 内:橙 7.5YR 6/6			
7	003-02	砥石	d 7 SH331										

第2表 出土遺物観察表

〈遺物観察表凡例〉

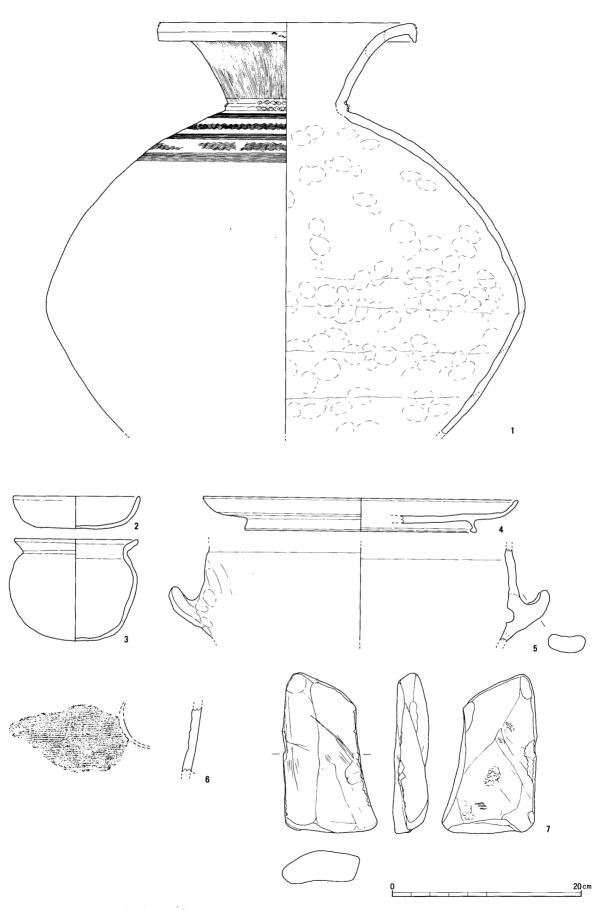
番号:図版に対応する番号である。 登録番号:実測図作成番号である。

計測値:計測できたものについて表記した。

胎土:密・やや密・やや粗・粗の4段階で表記した。

焼成:良・並・不良の3段階で表記した。

色調:『新版 標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編 9版 1989)を基準にしている。



第8図 出土遺物実測図(1:4)

IV 結語

今回の調査は、清水谷遺跡の調査の4年次目にあたる。これをもって、清水谷遺跡の調査はひとまず一段落することになる。ここでは、過去の調査結果を踏まえながら、今回の調査結果の考察を若干記述する。

1. SK335 について

弥生時代の遺構として確認できたのは、今回SK 335のみである。出土した土器は、壺(1) 1 点である。資料が少ないため、明確に時期を決定することには慎重を要するが、おそらく、弥生時代初頭の天花寺 1 期から 2 期にかけてのものと思われる。この時期は、第 3 次調査で確認されている環濠が機能しており、この環濠の東側から丘陵北方にかけて、居住域が広がっていたと予想されている。 SK335は、この環濠の西側、即ち外側にあたる。今回、S K335のような土坑を 1 基しか検出できなかったこと、 SK335が土器棺墓であることの不確実性から断言するまでには至らないが、当時の集落では、環濠の内と外を、居住域と墓域とに分けていた可能性も考えられる。

2. 奈良時代の遺構について

今回は、竪穴住居 2 棟と土坑 1 基を確認した。竪穴住居は、第 3 次調査で確認された 3 棟のものや、隣接する小谷赤坂遺跡の第 1 次調査で確認されたものと、規模が小さいこと・明確な主柱穴が見当たらないこと・カマドが構築されていること等から、ほ

[註・参考文献]

- ① 伊藤裕偉『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告』(三重県埋蔵文 化財センター 1996)
- ② 木野本和之・川崎志乃『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅳ』 (三重県埋蔵文化財センター 2000)
- ③ 竹内英昭「伊勢地方の埴輪事情」(『天花寺山』 一志町・嬉野町遺跡調査会 1991)
- ④ 註②文献に同じ。

は同形態のものであると思われる。カマドは半地下式と地上式の両方がみられたが、前述した過去の調査で指摘されている、袖にあたる部分が、補修あるいは造り変え後のものであるかどうかの確認は不十分であった。また、貼床は今回の調査では確認できなかった。

今回の調査区のすぐ西隣には第2次調査区が広がっており、検出された奈良時代の遺構は土坑数基のみである。これらは、この調査区の東側で確認されている集落跡とは時期が異なる。従って、SH 330・SH331が、今回の調査区以東で確認されている奈良時代(8世紀後半)の集落跡の西辺であり、また、調査区が丘陵上にひろがる平坦面の南端に相当することから、この集落のひろがりは、北方に向かっていると予想される。

3. おわりに

今回の調査で、ようやく清水谷遺跡としての調査が一段落する。ここでは主に、清水谷遺跡の過去の調査をふまえた考察をしてきたが、次年度以降も隣接する小谷赤坂遺跡の調査は継続して行われる予定である。この天花寺丘陵全体を見渡しての考察は、調査の終了を待って、再度行っていく必要がある。

また、清水谷遺跡の北方には、いまだ貴重な資料が土中に眠っているものと思われる。今後、これらが大切に保存されていくことを心より願うものである。

- ⑤ 註②文献に同じ。
- ⑥ 註②文献に同じ。
- ⑦ 註①文献に同じ。
- ⑧ 註①・②文献に同じ。
- ① 和氣清章「清水谷遺跡発掘調査報告」(嬉野町教育委員会 1999)
- ⑩ 註⑨文献に同じ。

図版 1

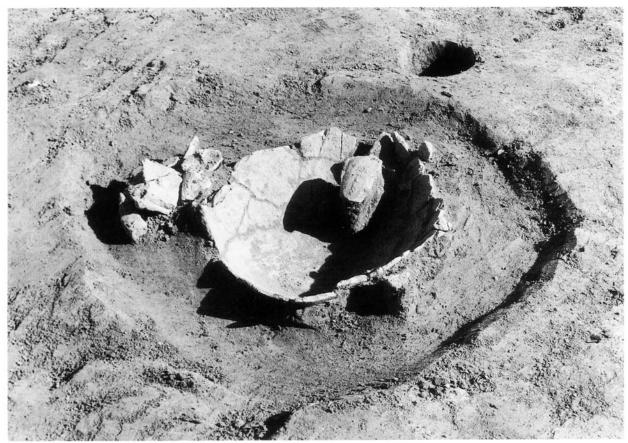


調査前風景(東から)

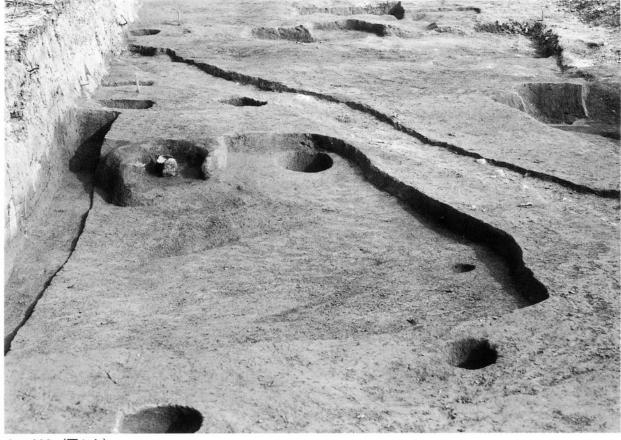


調査区全景(東から)

図版 2

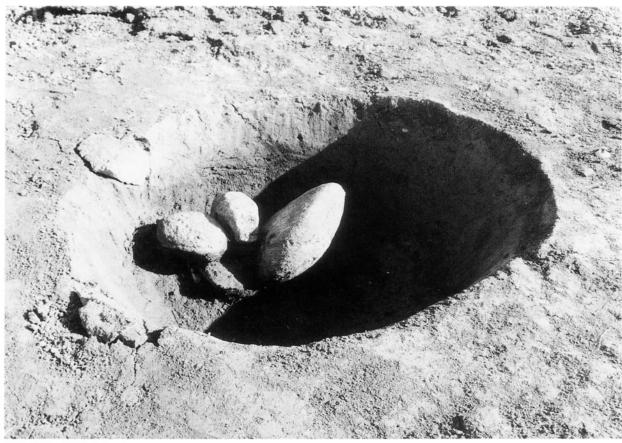


SK335 (西から)

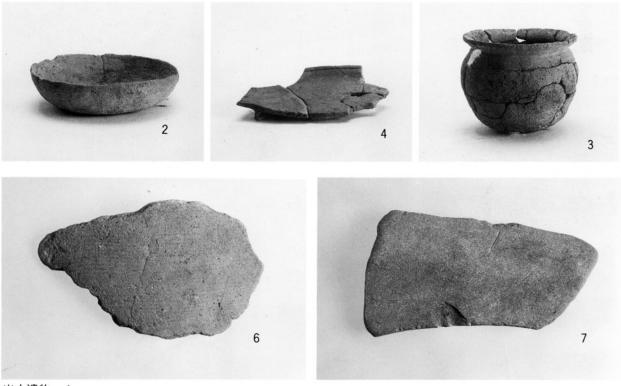


SH330 (西から)

図版 3



SK334 (西から)



出土遺物 1





出土遺物 2

報告書抄録

ふ り が	なてん	げいじきゅうりょう	ないいせき	らぐんはっくつ	ちょうさほうこく	5					
書	名天	天 花 寺 丘 陵 内 遺 跡 群 発 掘 調 査 報 告 (V)									
副書	名 ~-	~一志郡嬉野町天花寺所在、清水谷遺跡(第4次)の調査~									
巻	次										
シリーズ	名 三	三重県埋蔵文化財調査報告									
シリーズ番	号 2	2 0 9									
編者者	名 柴[柴山 圭子									
編集機	関 三	三重県埋蔵文化財センター									
所 在	地 〒	〒 515 — 0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596 (52)1732									
発 行 年 月	日 2	000年 3)	月 3	1 日							
ふりがな	ふりカ		ı -	·	北緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因		
所収遺跡名	<u>所</u> 在	地	5町村	遺跡番号	0 / "	0 / "		m ²			
しみずだにいせき清水谷遺跡		1 -	1405	280	34° 37′ 56″	136°27′22″	19990928 \(\) 19991221	600	天花寺一志嬉野 インター線地方 特 定 道 路 整 備 事業		
所収遺跡名	種別	主な時代	È	なり憩	遺構	主 な	遺物	特	記事項		
清水谷遺跡	集落跡	弥生時代 奈良時代	土坑竪穴	住居・土地	坑	壺土師器・砥	石				

平成 12(2000) 年 3 月に刊行されたものをもとに 平成 19(2007) 年 10 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 209

天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告(V)

2000年(平成12年)3月編集・発行三重県埋蔵文化財センター印刷者東海印刷株式会社